

[068] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10200>

出版情報：語文研究. 68, 1989-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

奥村三雄編『九州方言の史的研究』

昭和四十四年の『九州方言の基礎的研究』（九州方言学会編、風間書房）刊行以来、久しく現れなかった九州方言の本格的な研究が、奥村三雄先生の編著という形で、この程公刊された。
本書の構成、並びに執筆担当者（敬称略執筆順）を示せば、次の如くである。

第一章 九州諸方言の史的考察（奥村三雄）

- 一、九州諸方言の分派——方言国語史的考察
- 二、九州諸方言の古さ——文献方言史的考察

第二章 方言国語史的研究

- 一、方言地理学的研究（杉村孝夫、伊原信一、木部暢子、高橋敬一、辛島美絵）
- 二、九州諸方言変化の実態（中村萬里、添田建治郎、陣内正敬、二階堂整、崎村弘文）

第三章 文献方言史的研究

- 一、文献方言史総論（迫野虔徳）
- 二、文献方言史各論（高山倫明、福田益和、矢野準、伊佐山潤子、坂口至、藤井茂利、）

第四章 九州方言研究史（辛島美絵、二階堂整、江口泰生、赤峯裕子、山下和弘、坂本浩一、高山百合子）

第五章 筑後方言資料『はまおぎ』（解題岡島昭浩）

本書は筑紫国語学談話会叢書第一集、九州方言学会編書第二冊等

の意味もこめていっているという。
同時にまた、編者が近々刊行を予定している『方言国語史研究』の実践編第一部をなすとのことで、その一日も早い完成が望まれる。

（平成元年二月 桜楓社 A5判 八三二頁 四二〇〇円）

東秀吉著

『球磨の話し言葉 明治にさかのぼる』

『球磨の話し言葉 一 武んしたちの語りくち』

両書とも、文字どおり筆者のライフワークと成った球磨弁研究の成果報告である。

先ず、『球磨の話し言葉 明治にさかのぼる』は、『球磨弁 語彙と語法』に於いて成された当該方言の現状報告に後を承け、球磨弁のルーツを遡究する。即ち、明治三十三年旧相良藩土稻留三郎筆「熊津連く咄」を検討資料に据え、文献に遺在する状況からかつての姿を探ろうと試みているのである。

内訳は、はじめに著者・背景・体裁・内容について触れた後、I 音の訛り、II 球磨の話し言葉いろいろの語彙 の両部に互り、資料原文の実例から細かな検討を施す。当該方言に堪能な著者ならではの的確な分析に加え、『日葡辞書』『物類称呼』等の文献資料とのつき合わせに依って、堅実な考察が展開されるのである。終部には、
III 原文引用 として、会話体・独り語り部分を中心に二十一篇が

註を付して抜粋翻刻されている。

次に、『球磨の話し言葉 一武んしたちの語りくち』は、先掲三部作が旧藍田村大字間の車道・旧人吉町字南町附近を対象としたのに対し、こちらは旧一武村地区での三年に亘る調査の成果である。

内容は、生き生きとした会話報告（註・共通語訳付）を間に挿む構成で、当該方言の発音・文法・語彙と手広い分析が施される。

両書ともに、筆者のこよなく愛した球磨弁への飽くなき探究心の結晶であり、方言資料としてはもとより、民俗資料としても実に貴重な報告となっている。さらなる成果が望まれた矢先、著者東秀吉氏は平成元年七月に御逝去なされた。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

（昭和六十一年六月・同六十三年三月・B6判 二九五頁・二六一頁、私家版）

吉田達著

『伊勢物語・大和物語』 その心とかたち

本書は、『伊勢物語』と『大和物語』とを研究対象とした、著者初めでの論文集である。全体は三部より構成されており、第Ⅰ・Ⅱ部が『伊勢物語』、第Ⅲ部が『大和物語』についての論考となっている。内容は次の通りである。

第Ⅰ部『伊勢物語』その心とかたち

〔Ⅰ〕「初段」を考える

〔Ⅱ〕「二段」を考える―挿入句「いかか思ひけん」の表出意図

について―

〔Ⅲ〕「六段」を考える

〔Ⅳ〕再び、「初段」を考える

第Ⅱ部

〔序章〕業平在世期の都鄙意識を考える

―「楽舞」記事を中心として―

〔Ⅰ〕「昔男」の羞恥について

〔Ⅱ〕「五〇段」―「五九段」における編成意図について―章段
連接に見える言語遊戯性とそれを超えるもの―

〔Ⅲ〕「女」の羞恥について

〔Ⅳ〕「女の色好み」と、「昔男」の敗退

〔結章〕『伊勢物語』における四つの「かいま見」を考える

第Ⅲ部『大和物語』その心とかたち・断章

〔Ⅰ〕「初段」を考える―宇多Ⅱ「伊勢の御」所生子二人説を背景として―

〔Ⅱ〕「一四七段」の文体と方法を考える

〔Ⅲ〕「一二七段」を考える―「紅染深色禁制」を背景として―

〔Ⅳ〕「一〇三段」における「いろこのむ」を考える―「深紅色禁制」を背景として―

なお、第Ⅰ・Ⅲ部の論考は、昭和五十三年から昭和六十一年までの間に発表されたものよりなり、第Ⅱ部は、本書の出版にあたって新たに書き下されたものである。

（昭和六十三年七月 九大出版会 A5判 五四八頁 一〇〇〇〇円）

森下純昭ほか著『新釈とりかへばや』

本書は書名の示す通り、『とりかへばや』の本格的注釈書の一つである。『とりかへばや』は、平安朝後期の物語作品群の中において、重要な地位を占める作品であるが、これまでに刊行された注釈書の数は非常に少なく、また主要な古典注釈叢書にも取り上げられていない。本書の刊行は『とりかへばや』研究において一期を画する出来事である。

本文は、宮内庁書陵部蔵御所本を底本とし、これに四系統計七本の諸本を校合する。

注釈は、内容に応じて十四章に分けられ、さらに各章ごとに適宜六十三節程度に分かれている。まず「本文」の部分に、頭注として前述の校合本との校異が付される。本文は、校合部分以外にも読みやすさを考慮して校訂がなされているが、原形は傍記等の形で残され、底本本文の尊重がはかられている。ついで、「通釈」及び「語釈」部分に口語訳、各語の解釈、解説が示され、さらに必要に応じて「補説」の項が立てられ、解説の充実が図られる。

巻末には作品解説と底本・校合本解説の二部よりなる解説を付す。作品解説では、成立年次・作者、古『とりかへばや』の人物関係、先行作品の受容、主題と構想などを考察し、底本・校合本解説では、本文の校合に用いられた諸本の概説を述べる。

(昭和六十三年五月 風間書房 A5判 六八三頁 一八〇〇〇円)

田坂憲二編『源氏釈諸本集成』

本書は、平安末期藤原伊行の著した『源氏釈』の、現在知られるかぎりの資料を博搜し、一覽できるようにした労作である。内容は次に掲げる三部からなる。

一、源氏釈諸本集成

- ・北野克氏蔵『末摘花・紅葉賀断簡』（残存本）
- ・書陵部蔵『源氏物語注釈』所収『源氏物語或抄物』（抄出本）
- ・書陵部本（明石巻迄の残存本）
- ・前田家本（元本）

以上の四本をその異同が比較できるよう対照表にしたもの。注釈の項目ごとに分類し、上下に並記してあるので、注釈の異同や有無が一目でわかるようになっていいる。

二、源氏釈古筆切集成

伝頭昭筆、伝良経筆、伝浄弁筆の『源氏釈』の古筆断簡六葉を掲出する。

三、本書所収の『源氏物語或抄物』、前田家本『源氏釈』と、吉川家本『源氏物語勘物』および都立中央図書館本との注釈項目の出入りについて一覽できるようにしたもの。注釈箇所とその該当本文を小学館日本古典全集『源氏物語』の頁により示し、検索を容易にし研究者の便をはかっている。

本書は、伝本間の異同が激しく、個々に見ていたのでは判然としない注釈の状況を解明するための貴重な資料集成である。

(昭和六十二年十二月 権歌書房 A5判 二二〇頁 二八〇〇円)

後藤昭雄編『金剛寺藏 注好撰』

平安末期の説話集である『注好撰』は、これまで東寺観智院本系統の写本のみが知られていたが、このたび別系統の一本である金剛寺藏本が後藤昭雄氏の編により、和泉書院叢書の一冊として公刊された。金剛寺は河内長野市にある古刹。鎌倉時代の古写本をはじめ多くの聖教典籍類が所蔵されている。後藤氏は、『本朝文粹』の鎌倉期古写本の調査をきっかけにこの『金剛寺本注好撰』を発見された。本書は観智院本にない下巻を完備した新資料である。内容は、目錄・全文の影印・観智院本との詳細な校異を掲げる翻刻・及び解説・固有名詞を中心とした語句索引である。

金剛寺本については、本書の解説に詳しいが、中下巻のみの零本ながら、観智院本にない幾つかの特色が見られる。解説に従って主な点を挙げれば、

- ・ 観智院本に比べてはるかに詳密な傍訓、送り仮名が付されている、まます声が付されている場合もあり、国語史の資料として重要である。
- ・ 観智院本にない二十条もの未知の説話を載せる。
- ・ 観智院本の本文との間でかなりの異同が見られ、貴重な校資料となり得る。

の三点だろう。

今昔物語集の成立との関連でもしばしば論じられる『注好撰』の別系統の本文を手近に見られるようになったことは、国語学、国文学の両方の研究者にとって大きな恩恵である。本書によって更なる

研究の進展が期待される。

(昭和六十三年十月 和泉書院 A5判 二四二頁 五八〇〇円)

今井源衛編『源氏物語とその周縁』

今井源衛先生とその門下生による研究会春秋会では、先に『我身にたどる姫君』の全訳注を上梓したが、そのメンバーを中心に、本年二月に古稀を迎えられた先生をお祝いするために編まれたのが本書である。執筆者と題目を次に掲げる。

「おのがいとめでたしと」考(今井源衛)

「ふるものがたり」攷(今西祐一郎)

夕顔考(中島あや子)

鬚黒北の方造型の意義(西丸妙子)

若菜巻以降の紫上の妻としての立場(上藤重矩)

宇治の中の君について(武谷恵美子)

都立中央図書館本『源氏釈』について(田坂憲二)

物語史(源氏以後)・断章——『夜の寝覚』『今とりかへばや』から『我身にたどる姫君』へ——(辛島正雄)

『大鏡』の主題と執筆意図(森下純昭)

藤原為光考——その生涯と為光・誠信父子周辺の文人たち——

(福井迪子)

嶋田忠臣と『莊子』(金原理)

菅原道真と都良香——史料と説話のはざまを探る——(田坂順子)

史料所載平安朝詩題索引(後藤昭雄)

(影印)『光源氏物語本事』・『幻中類林』

影印解題(田坂憲一)

私の履歷書(今井源衛)

なお今井先生御自身による「私の履歷書」は、個人の研究史であるばかりでなく、戦中・戦後という時代において、文学研究の置かれてきた状況を語る学界史としても貴重である。

(平成元年6月 和泉書院 A5判 三五一頁 九七八五円)

飯倉洋一校訂『佚齋樗山集』

今回、「叢書江戸文庫」シリーズに収められた本書には、佚齋樗山の、いわゆる樗山七部の書のうち、『天狗芸術論』(享保十四年刊)を除くもの、つまり、

『田舎荘子』／『田舎荘子外篇』／『河伯井蛙文談』／『再来田舎一休』／『六道十会録』／『英雄軍談』／『雜篇田舎荘子』が収録されている。

これらは、『田舎荘子』のほかは、いずれも未翻刻だったものであり、また、その『田舎荘子』にしても、帝國文庫『落語全集』の誤りの多い翻刻であったりして、実質的には本書において初めて、信頼できる本文で、樗山の著述が、まとめて手軽に見ることができるようになったと言つてよい。

享保時代の教化政策と老荘思想の流行にのつて、談義本と言われる文芸が登場した。談義本の意義や、その先駆とも言うべき樗山については、中野三敏氏の『戯作研究』に収められている諸論文において、明らかにされて既に久しい。しかし、これまで研究者は、樗山の七部の書すら、容易には読めなかったわけである。

そうした意味で、本書は研究者待望のものと言えよう。なお、飯

倉洋一氏の解題には、『田舎荘子』をはじめとする収録作品に、未載の『天狗芸術論』まで含めた著述のそれぞれにおいて、諸本についての詳細な調査が備わっている。

(昭和六十三年十月 国書刊行会 B6判 四五三頁 四六〇〇円)

『中村幸彦著述集』

昭和五十七年六月以来七年、平成元年七月に、『中村幸彦著述集』全十五巻が遂に完結をみた。

本著述集については、既に研究者の周知のことであり、所々に触れられることもあって、改めてここで取り上げるまでもないだろう。よって、簡単に、著述集の構成について記すのみにとどめたい。

全巻の構成は以下のとおりである。

- 第一巻 近世文芸思潮論
- 第二巻 近世的表現
- 第三巻 近世文学贖稿
- 第四巻 近世小説史
- 第五巻 近世小説様式史考
- 第六巻 近世作家作品論
- 第七巻 近世比較文学攷
- 第八巻 戯作論
- 第九巻 俳諧瑣説
- 第十巻 舌耕文学談
- 第十一巻 漢学者記事
- 第十二巻 国学者紀譚

第十三卷 近世世語

第十四卷 書誌聚談

第十五卷 菜色子雜筆

右の構成からも知られるように、本著述集は、近世のあらゆる分野に及ぶ、中村学の集大成であり、『第二卷 近世的表現』と『第四卷 近世小説史』は、中村先生が新たに書き下ろされたものである。なかでも、『近世小説史』は、現時点では中村先生にのみ可能とも言えるもので、まさに、近世文学の研究者のみならず、文学研究者が永いこと待ち望んでいた、最も信頼できる一冊である。

本著述集の完結は、中村先生の昭和六十一年度朝日賞受賞と合わせて、まことに喜ばしいことであり、ますますの御健康と御活躍をお祈り申し上げます。
(昭和五十七年六月〜平成元年七月 中央公論社 A5判 六五〇〇〜八六〇〇円)

海老井英次

『芥川龍之介論攷—自己覚醒から解体へ—』

このたび海老井英次先生が二十年間にわたる芥川研究の成果を一冊にまとめられた。各部の章だては次のとおりである。

第一部 作品論

第一章 初期習作の世界—芥川文学の〈原点〉の検討—

第二章 「羅生門」—〈自我〉覚醒のドラマ

第三章 「鼻」と「芋粥」—〈自我〉意識と〈人間〉への憧憬—

第四章 「手巾」と「偷盗」—文壇への登場

第五章 「戯作三昧」と「地獄変」—〈自我〉の神格化

第六章 「蜘蛛の糸」「奉教人の死」その他—芸術家と彼岸的なものと—

第七章 「秋」を中心に—〈感動〉から〈認識〉へ

第八章 「藪の中」—〈中有〉の世界と自己劇化—

第九章 「六の宮の姫君」を中心に—〈中有〉の世界の展開—

第十章 「少年」その他—〈告白〉への過程としての〈私小説〉—

第十一章 「玄鶴山房」と「蜃気楼」—〈人間〉の解体

第十二章 「鹵軍」と「或阿呆の一生」—遺稿にみられる〈自我〉

の解体

第二部 作家研究

第一章 芥川文学における空間の問題

第二章 芥川文学の系譜—堀辰雄による〈芥川的なもの〉の超克

第一部作品論は大正文学を貫流している自我の絶対化とその崩壊の過程の—典型を芥川文学の中に見て初期「羅生門」から晩期「鹵軍」或阿呆の「一生」までを詳細に分析解説することによってその実際を検証したものである。第二部作家研究では、特に第二章で芥川文学の系譜を堀辰雄に見ようとする。第一節〈芥川文学の系譜〉、第二節〈芥川龍之介と堀辰雄〉〈歴史小説〉における比較—、第三節〈美しい村〉—〈永遠に守らんとするもの〉の定立—から構成される。

(昭和六十三年二月 桜楓社 A5判 五四三頁 八八〇〇円)

石田忠彦『坪内逍遙研究 附 文学論初出資料』

本書は第一部「文学活動の概括」、第二部「試論と考証」、附録「文学論初出資料」からなる。一部と二部の各章は次のとおりである。

第一部 文学活動の概括

第一章 文学的出発

第二章 『小説神髓』に先行する作品群

第三章 小説における真理の追究

第四章 「ヨキヒト」設定の経過

第五章 「尤も不得意な」時期

第六章 没理想論の形成

第七章 没理想論争

第八章 小説理論の完結

第二部 試論と考証

第一章 初期戯文の没理想性

第二章 年譜・逸文考―「清治湯の講釈」「歴史思想の改造」など

第三章 小説の法則性―『小説神髓』論―

第四章 小説の効用性―『小説神髓』論―

第五章 進化論小説の試み―『三妖』三妖『当世書生氣質』論―

第六章 小説理論における美の真理

第七章 「真理」の行方―「細君」論―

第八章 「戯文」の意味―没理想論の萌芽―

第九章 「理想」の意義―没理想論争への一視点―

第十章 小説の普遍性―「美辞論稿」解説―

第一部は本書のための書きおろしであり、明治十五年から二十六年までの文学活動を小説の目的・手段・効用の三本の軸で理論化しようとした試論であって著者の方法意識が明確に示された部分である。第二部は一部の叙述をさらに深化し考証したものである。ここでは難解な逍遙の作品が氏の明晰な理論によって論理的に解明解説される。それは逍遙の難解さを逆に「豊かさ」としてとらえようとする氏の意欲のあらわれでもある。附録には明治十六年九月二十日「明治協会雑誌」二十五号に掲載された「小説文体」をはじめとして現在入手困難な初期文学論二十八編が初出形で収まる。資料集として貴重。

(昭和六十三年二月 九州大学出版会 A5判 四六八頁 八五〇〇円)

黒田彰 後藤昭雄 東野治之 三木雅博 編著

『上野本 注千字文 注解』

梁の周興嗣作『千字文』は、『蒙求』や『百詠』などと並ぶ代表的な幼学書であり、我が国でも平安時代から広く利用されてきた。本書はその中で完本としては現存最古の千字文注たる、上野淳一氏所蔵、重要文化財『注千字文』の影印、翻刻、注解である。

内容は、略解題、影印、翻刻及び注解、敦煌本の影印と翻刻、解説、書名・人名・地名索引、字訓・付訓・字音索引、千字文本文漢

字索引よりなる。

上野本は、平安時代に広く行われていた李暹による古注であり、今日他に類本を見ない貴重な伝本。『日本国見在書目録』に見える「千字文一卷 李暹注」は、上野本と同じ内容のものである可能性が高いといわれ、平安時代の漢籍受容や訓読を研究するうえで必要不可欠からざる資料であることは言を俟たない。しかしながら、原本は誤写も散見し文意必ずしも平明でない。本書により精緻な校異と注解を付した校訂本文が得られることになり、また事項索引にとどまらず、字訓、付訓、字音索引も備わって、国語学的研究にも資する所は大きい。なお残闕本ながら、上野本よりも古い敦煌本の影印と校訂本文を載せているのは利用者の便益を考慮した周到な措置と言えよう。

(平成元年六月 和泉書院 A5判 二四〇頁 六五〇〇円)

中村幸彦・中野三敏他四名編

『洒落本大成』

「洒落本大成」全二十九巻・補巻一卷が完結した。昭和五十三年九月から昭和六十三年十一月まで、十年にわたっての、まさに大事業であった。

洒落本の翻字・集成ということでは、戦前に「洒落本大系」があったが、本大成は、いわゆる初期洒落本から写本の洒落本に到るまで、現存するすべての洒落本、六百二点を収めた、いわば洒落本という一つの分野の完全な翻字・集成である。それに加えて、所収

する作品の各々については、すべての洒落本に目を通された編集委員による、書誌的事項の整った解題も備わっている。また、補巻には、洒落本刊本写本年表も存する。

こうした本大成によって、近世のあらゆる文芸の中で、洒落本が最も資料的に完備された分野となったと言えよう。その意味で、本大成はまた、近世文学研究における、現在の最も高い水準を示すものである。

会話体を主体とする洒落本は、周知の如く、近世語の重要な資料でもある。そうしたものも含めた洒落本研究が、「洒落本大成」という基礎の上に、更に進展することを信ずるものである。

(昭和五十三年九月／昭和六十三年十一月、中央公論社、A5判、三八〇〇〜七八〇〇円)